歴史的なきずなで結ばれた交流をいつまでも！

～札幌白石親交会創立30周年記念親善訪問団30名が札幌市白石区を訪問～

札幌白石区ふるさと会、札幌白石親交会が創立されてから、今年で30年を迎えました。

そこで、創立30周年の記念事業として、札幌白石区ふるさと会では、札幌市白石区開拓の先導を担った佐藤孝郷氏の顕彰碑を、札幌市立白石小学校「白石の森」に建立しました。

７月16日に行われた除幕式には、風間市長をはじめ30名の訪問団が出席。幾多の苦難を乗り越えて入植を果たし、現在の札幌市白石区の礎を築いた故人の功績をたたえました。

翌日の17日には、第30回となる「白石区ふるさとまつり」に参加し、歴史的なきずなで結ばれた両市の交流を深め、今後より一層の交流を推進することを確認しました。

札幌白石開拓の恩人

佐藤（さとう） 孝郷（たかさと）氏

嘉永３年（１８５０）に生まれた佐藤孝郷は、慶応２年（１８６６）に16歳の若さで家老職を継ぎました。２６０有余年続いた江戸幕府が終わりを迎える前年です。

家老就任後間もなく戊辰戦争が始り、明治元年（１８６８）、奥羽25藩が白石城に集まり白石同盟を結んで結束を固めましたが、18歳の家老孝郷はこの重要な会議でどういう役割を果たしたのかは不明です。

戦争に敗れ、仙台藩は禄高を減らされ、白石を預かる片倉小十郎は玄米55俵と、無いに等しいまでに減らされ、家臣団７、４５９人は失業して路頭に迷うことになってしまいました。ある者は地元にとどまり百姓となり、ある者は主君長男の片倉小十郎景範とともに明治３年（１８７０）現在の登別市幌別に移住しました。

このときに家老の孝郷も加わって北海道の状況を調査し、翌年正月に帰郷しています。

残る者の移住がなかなか決まらず、資金が底をつく状況のなかで孝郷は再三にわたり白石県や角田県に交渉し、明治４年３月17日、ようやく太政官は角田県在留の家来６００人に北海道移住開拓使貫属（かんぞく）を命じ、後日、孝郷に貫属取締を命じました。

孝郷に率いられた６００余人の老若男女の大集団は、咸臨丸が座礁する事故を乗り越え、10月９日に石狩に到着しましたが、いつまでも入植地が決まらず、一行は厳寒と食糧不足から不安に駆り立てられました。孝郷は彼らを慰め、励ましながら開拓使と交渉を続けました。

入植の翌５年春、孝郷は他の同胞同様に荒れ地を開墾し、畑を広げるつもりでしたが、彼の実力を知った開拓使は４月16日に孝郷を呼び出し、白石村貫属取締戸長を命じました。この役職は多忙を極め、開墾に従事する余裕はなく、自然に役人の道を進むことになったのです。

その後、孝郷は23歳で札幌学校漢学助教授兼舎監となり、札幌町戸長兼白石・雁来両村戸長、札幌区初代戸長などを歴任し、50歳で現在の慈恵医大漢学講師となっています。

また、孝郷は若者の教育の重要さを考え、最初の土地割り当てでは善俗堂学問所（白石小学校の前身）用地を確保しています。

彼の業績を示す文書が数多く、北海道文書館や北海道開拓記念館で見ることができます。

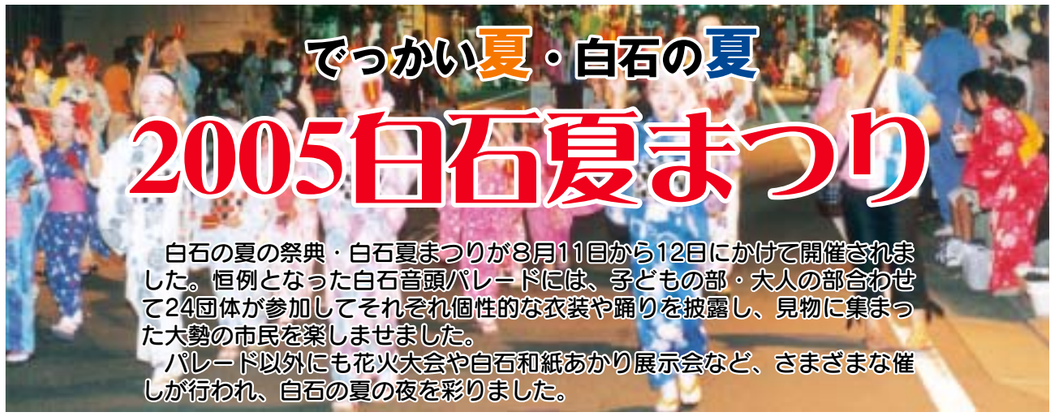
胃腸病を患い、大正11年１月10日、72歳で生涯を終え、現在は白石市傑山寺に葬られています。

（札幌市白石区ホームページより）

▲大人の部準優勝・よさこい争乱白石城

▲大人の部優勝・㈱ニチレイフーズ・プロ白石工場

▲大人の部第3位・仙南サナトリウム



でっかい夏・白石の夏

2005白石夏まつり

白石の夏の祭典・白石夏まつりが８月11日から12日にかけて開催されました。恒例となった白石音頭パレードには、子どもの部・大人の部合わせて24団体が参加してそれぞれ個性的な衣装や踊りを披露し、見物に集まった大勢の市民を楽しませました。

パレード以外にも花火大会や白石和紙あかり展示会など、さまざまな催しが行われ、白石の夏の夜を彩りました。

▲流しうーめん（ポーチパーク）

▲子どもの部優勝・キューブ新体操教室

▲景綱囃子（ばやし）を披露（すまｉるひろば）

▲幻想的な光を放つあかり・しろいし和紙あかり展示会（壽丸屋敷）

▲白石市消防団による伝統の「はしご乗り」

▲パレードに飛び入り参加した札幌白石区の皆さん